

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究(3)」 第3回(通算第12回)研究会

日時:2014年10月11日(土) 午後1時~7時

場所:AA研棟3階マルチメディアセミナー室(306号室)

報告者:

1. 曾我亨 (AA研共同研究員・弘前大学)
2. 大村敬一 (AA研共同研究員・大阪大学)

内容(要旨)

1. 「三項関係のなかで生まれる他者」(曾我亨)

本発表では、「他者とはなにか」を問うのではなく、「他者がいかに現れるか」あるいは「他者はいかなるときに感知されるか」を問題にした。理念的な議論をするのではなく、コミュニケーションのなかから他者を捉えようとした。その具体的手順として、われわれがターゲットとしたい「他者」とはどのような他者のことであるかを考え、その「他者」が三角関係の中からどのように現れてくるのかを考えた。

まずフッサールの間主観性にもとづく他者理解について簡単に概観した。そのうえで、他者に先立って自己が想定されていること、また間主観性をなりたたせるためには、自己と他者がともにおなじ言語世界、あるいは文化に属することが必要であることを指摘した。そのうえで、人類学がこれまで問題にしてきた「他者」すなわち文化や言語世界を跨いで存在する他者を理解するためには、フッサールのいう間主観性では不十分ではないかと主張した。さらにフッサールの間主観性にもとづく他者が文化をまたいで存在するとしたら、それは人間の生理的特質に依拠した「生理的な他者」ではないかと疑義を述べた。

逆に、レヴィナスが想定する他者は、絶対的に理解できない存在として措定されており、人類学者が捉えようとする、あるいは本研究会が捉えようとする他者とは重なり合わないことを指摘した。そのうえで、われわれが捉えるべき他者の問題として、レナート・ロサルドによる「首狩りへの衝動の理解」に関する逸話を引いて説明した。この有名な逸話を要約すると次のようになる。「ロサルドは、当初、イロンゴットたちが説明する首狩りの説明——すなわち、死別のさいに感じる激しい怒りが、ひとを首狩りに駆り立てる——を理解することができなかった。そこで彼は当初、人類学の交換モデルを用いて『理解』しようとした。けれども、ある時、彼の妻がフィールドで滑落死したのを期に、突如、怒りの感情がわきあがった。そしてイロンゴットの説明を直接、理解することができた。」この逸話に登場するイロンゴットのような他者を、私たちは捉えたいのであり、それは私とは意見や考えを異にする社会的な他者であるとした。

このロサルドの逸話を、本発表では他者を理解する2つの仕方として取り上げた。すなわち目の前の相手を直接理解するという理解の仕方と、当初、ロサルドがおこなったように理論や状況、歴史など、コミュニケーションの外部を参照することで相手を「理解」する仕方の2つである。

このような準備を経て、本発表では「他者とはいかなる存在か」という哲学的問いを離れ、「他者がどのように出現するか」を問うべきであると主張した。さらにこの問いに答えるには、「他者になりうる相手(A)」と「わたし(B)」だけの関係を考えるのは不十分で、必ず第三項(X)が必要となると主張した。ここでいう第三項は、モノでもコトでもヒトでも良く、このモノやコトやヒトをめぐる「他者になりうる相手(A)」が何がしらの意見や価値観を表明し、その意見や価値観が「わたし(B)」をまきこみそうになるとき、他者性を感知するのであるのだとした。その具体的なモデルとして、ヘイトスピーチを例にあげた。たとえば、わたし(B)はヘイトスピーチを聞くと、そのヘイトスピーチをするひと(A)を他者として、すなわち理解しがたい相手として感知することがある(図1)。もちろん、わたし(B)は、国民国家論やナショナリズム論の枠組みを援用することで、この人(A)を理解することはできる。しかし直接的には、理解できないと感知することがあるのである(もちろん逆に親近感を感じる人もいるだろう)。

こうした形で他者が感知される例として、発表者が東アフリカで調査を行っているふたつの牧畜民、ガブラ・マルベとガブラ・ミゴで収集した事例をとりあげ、他者がどのような状況で出現するのかを詳細に検討した。その具体例を、この要約にはしめさないが、検討の結果、(1)AによるXに対する価値の表明と、(2)AによるBへの支配、の両者が絡まりあうときに、BにとってAが他者として感知されるのだとした。

ところで、人類の進化史的基盤を考えた場合、他者(理解しがたい相手)と共存できるという能力は、ヒトの固有の能力と考えることができる。ヒトはこの能力を有することで、他のどの霊長類にもつukれないほど多くの人からなる社会をつくることに成功した。その能力とは、いかなるものであるかを最後に検討した。ヒトは、目の前の人Aを、他者であると感知したとき、その他者を直接的には理解できないとしても、理論や状況、暮らし方、歴史など、コミュニケーションの外部を参照することで「理解」することができる。こうして、その他者とはつながらないまでも、ともに暮らすことを許容するように進化したのではないだろうか。以上が本発表の結論である。

2. 「他者と異者のダイナミクス：カナダ・イヌイト社会にみる倫理の基盤」 (大村敬一)

この発表では、前回の発表(「子どもの他者化と野生動物の異者化：集団を生成して維持する想像力」2013年度第1回研究会20130428)での議論をエマニュエル・レヴィナスの「他者」論とパラフレーズすることで、人類の社会性と倫

理の進化史的基盤を考察し、レヴィナスの「他者」論を人類学が継承する可能性について考察した。

具体的には、関係が想像される際の視点の違いに着目することによって前回の発表で4つのタイプに類型化した関係のあり方、すなわち、(1)「システム／環境」関係、(2)閉じた自異関係(関係内部に閉じた「自己／異者たち」関係)、(3)自他関係(「自己／他者」関係)、(4)開いた自異関係(関係の外を巻き込んだ「自己／異者たち」関係と「自己たち／異者たち」関係)がレヴィナスの「他者」論の(1)「ある」(il y a)という「非人称的な存在という現象」としての「存在することそのもの」の関係、(2)「自己」が「他なるもの」を「糧」として「享受」する関係、(3)「主体」同士が相互に「他者」からの「責め」(有責性)を引き受け合うことで生じる愛の関係、(4)「正義の秩序」(「法理的公正」の「裁き」)によって「政治的境位」に生じる社会関係に相当することを明らかにし、その類型に基づいてイヌイトの拡大家族集団が生成されて維持されるメカニズムを分析した。そのうえで、想像力を介した社会関係の組織化が人類の社会集団の生成と維持にあたって重要な役割を果たしていることを明らかにするとともに、レヴィナスの「他者」論の問題点を指摘し、その問題点を人類学の民族誌的な研究が克服することで、その「他者」論を継承する可能性を検討した。

I 関係の類型論

(1)「システム／環境」関係：レヴィナスの云う「存在することそのもの」たちの関係(まだ「自己」も「他なるもの」も「主体」も「他者」も「第三者」もおらず、「ある」(il y a)という「非人称的な存在という現象」としての「存在することそのもの」たちの関係)

絶え間なく自己生成するシステム(原理的には細胞でも神経組織でも何でもよいが、ここでは生物個体を想定している)が絶え間なく自己生成することで生じ、維持されるシステムとその環境の関係。この関係では、システムの「内(システム)／外(環境)」の区別が生成されるが、その「内／外」の区別が「自己／異者」として意識されて客体化されることはない。つまり、「外(環境)」は「システム／環境」の界面での相互作用を通して知られるだけで、その外延は外に向かって無限に発散し、まとまりをもつ対象として客体化されることはない。また、「システム／環境」関係全体の外側が想像されることも、その外側から「システム／環境」関係の全体を客体化する視点が想像されることもない。そのため、この関係では、システムが自らを自己として意識することも、「システム／環境」関係の二つの項(「システム」と「環境」)が相対化されることも、この二つの項が互換的になることもない。

この「システム／環境」関係においては、いまだ「自己」も「他なるもの」も「主体」も「他者」も「第三者」も存在しない。この関係は「ある」(il y a)という「非人称的な存在という現象」としての「存在することそのもの」たち

の関係であり、レヴィナスの云う「あたり一面にひろがる、避けがたい、無名の存在することのざわめき」にあたる。

(2) 閉じた自異関係 (関係内部に閉じた「自己／異者たち」関係) : レヴィナスの云う「自己／他なるもの」関係 (「自己」が「他なるもの」を「糧」として「享受」する関係)

「システム／環境」関係の区別が意識され、システムがシステム自身を「自己」として意識し、その環境を「異者たち」の集合として客体化するが、その「自己／異者たち」関係全体の外側を想像することも、その外側として想像された視点から関係全体を客体化することもなく、「自己／異者たち」関係に埋め込まれた「自己」の視点のみに基づいて「異者たち」と相互作用を交わす関係。ここでは、現実の相互作用のなかにある「自己の視点」だけがあり、その「自己の視点」が相対化されることはない。この意味で、この関係は自己中心的な関係であり、そこでは、「自己」に対する配慮はあっても、「他者たち」に対する配慮はなく、「自己」は行為の主体となっても「他者たち」は行為の主体にならず、ただ反応を返してくる客体にすぎない。

この関係はレヴィナスの云う「自己／他なるもの」関係にあたり、「他者」のいない「自己」が、単に「いま、ここ、私」とは違うという意味での非—自己、非—私である「他なるもの」を「享受」し知解し把持し取り込む関係である。この関係では、「自己」は絶えず未知の「他なるもの」を新たな征服対象として探し求め、その「他なるもの」を「自己」に摂取することで「自己」が富裕化され、「自己」が豊かに養われる。こうした「他なるものの『同一者』への変質」が「自己／他なるもの」関係の本質をなす。

(3) 自他関係 (「自己／他者」関係) : レヴィナスの云う「主体／他者」関係 (どうしてもなく常にすでに「他者」との関係のなかにあり、他者との関係においてはじめて「主体」でありうるということを「主体」生成の超越的で無根拠な (私にはどうしてもない) 根拠として、つまりは「生きてここにあること (生き残ってしまったこと、他者との関係の遅れてしてやってくること、つねにすでに生きてしまっていること) の責め」として引きうけることで「主体」が生成する倫理的関係)

「自己／異者たち」関係にある「自己」が想像力によって「異者たち」に「自己」を投影することで、「自己」も「異者たち」もともに相互行為の主体となることで生じる。この関係では、二つの主体のどちらもが、想像された相手 (他者) の視点から相互に自己を客体化しつつ相対化しながら相手 (他者) と相互行為を交わし合う。そこでは、二つの主体のどちらもが、(1) 現実の自己と (2) その自己を客体化する相手 (他者) の視点として想像された自己 (想像された自己としての他者) に二重化され、「現実の自己としての自己」の視点と「想像の自己としての他者」の視点の間を行き来することを前提に相互行為する。つまり、「現実の自己の視点」に加えて、その自己を客体化する「他者としての自己の視点」が想像され、二つの主体のどちらもが「現実の自己としての自己の視点」と「想像の自己としての他者の視点」という二重の視点に立

つという前提のもとで、自己と他者が相対化されて互換的な項に変換される。この関係は、「私は他者になり変わり、その際に他者も私になり変わる人物として理解されるが、この事実を私も他者も了解している」ことを前提に相互行為が展開される事態としてアルフレッド・シュッツが定義したコミュニケーションでの関係に相当し、主体と主体を対等につなげる社会性の基礎となる。ここでは自己と他者は相互に互換的で対等な項として想像され、その想像された前提に基づいて相互行為が展開されるため、結果として対等な関係が生成する。この関係は誰に対しても何に対しても事実上無限に拡張してゆくことができるため、人類個体を同種他個体やそれ以外のものと結びつける接着剤として社会性の基礎となるが、その無限の拡張性のため、一つのまとまった集団に収束することはない。

この関係はレヴィナスの云う「主体／他者」関係にあたり、そこでは、どうしようもなく常にすでに「他者」との関係のなかにあり、他者との関係においてはじめて「主体」でありうるということを「主体」生成の超越的で無根拠な（私にはどうしようもない）根拠として、つまりは「生きてここにあること（生き残ってしまったこと、他者との関係の遅れてしてやってくること、つねにすでに生きてしまっていること）の責め」として引きうけることで「主体」が生成する。この関係では、「他なるもの」を自己に内在化して把持し知解することで「他なるもの」を取り込む「自己／他なるもの」関係とは対照的に、「主体」は「他者」の他者性を毀損しないままに「他者」と出会って交わる。この「他者」の他者性を毀損しないままに「他者」と交わることが「倫理」の基盤となる。この意味で、この「主体／他者」関係は倫理的関係と呼ぶことができる。

（４）開いた自異関係（関係の外を巻き込んだ「自己／異者たち」関係と「自己たち／異者たち」関係）：レヴィナスの云う社会関係（「正義の秩序」（「法的公正」の「裁き」）によって「政治的境位」に生じる社会関係）

自他関係にある複数の主体のうちの一つの主体が、その自他関係の網の目から切り離された者として想像され、その想像に基づいて、それ以外の主体と一方的な行為を非対称に交わす関係。この関係には、（１）切り離された主体が自己で、それ以外の主体たちが異者となる場合、（２）切り離された主体が異者で、それ以外の主体たちが自己たち（われわれ）となる場合の二種類がある。前者の場合、自他関係の網の目から切り離された立場として想像された主体が、残りの主体たちと相互行為を交わすことなく、その異者たちとしての主体たちを一方的に観察するという想像の場をもたらし、社会科学の基礎となる関係を生成する。他方で後者の場合、自他関係を交わし合う自己たちが、自他関係の網の目から切り離された異者と相互行為を交わすことなく、その異者に一方的な行為で働きかけるという想像の場が生成される。この後者の場が想像され、その想像に基づいて行為が生成されるとき、一つの異者に対して一方的な行為で働きかける自己たち（われわれ）が生成され、無限に拡張する自他関係が、一つの異者に対して一方的で非対称な行為で働きかけるという共通項をもつ集団として分節される。その結果として、主体を結びつける接着剤として社会性

の基本ではあるが、無限に接続可能で拡散してしまうためにまとまりのない自他関係のネットワークから、異者に対する一方的で非対称な関係を軸に生成する集団のまとまりが切り取られ、「われわれ」という集団が生成する。この関係はレヴィナスが云う「社会関係」にあたる。倫理的な「主体／他者」関係にある二者に第三者が加わることで、「他者」を評価するための「正義の秩序」（「法理的公正」の「裁き」）が要求される結果として「政治的境位」の関係として生じる。

II イヌイトの拡大家族集団の生成と維持のメカニズム

この4類型の関係のあり方に基づいて分析を行うと、カナダ極北圏の先住民であるイヌイトの拡大家族集団が生成されて維持されるメカニズムを次のように整理することができる。

(0) レヴィナスの「主体／他者」関係にある「真なるイヌイト」

イヌイト社会において「思慮」と「愛情」をバランスよく兼ねそなえた「大人」の理想像として目指される「真なるイヌイト」（Inunmariktuq）は、レヴィナスの云う「主体／他者」関係にある成熟した「成人」にあたる。「真なるイヌイト」とは、「思慮」の理念に基づいて相互に相互の自律性を尊重しつつ、「愛情」の理念に基づいて相互に助け合う関係にある「大人」のことだが、レヴィナスの云う倫理的な「主体／他者」関係にある「成人」とは、相手を取り込んで支配したりすることはせず、相手の他者性を損なうことなく相手と交わる倫理的な愛の関係にある者のことだからである。この意味で、他者の他者性を損なうことなく他者と交わる倫理的な愛こそ、イヌイト社会で目指される社会関係の基礎であると言える。

ただし、この倫理的な「主体／他者」関係が成立するためには相互性が重要な鍵になるため、イヌイト社会の「大人」はルーマンの云う「ダブル・コンティンジェント」なジレンマに常に置かれることになる。「他者」からの責めを引き受けが一方向的になってしまい、愛の双方向性が失われてしまうと、倫理的な「主体／他者」関係が支配と従属の「自己／他なるもの」関係に変質してしまうからである。この意味で、イヌイト社会の「大人」は常に「主体／他者」関係に孕まれる倫理的なジレンマに曝されており、そのジレンマを解決するための装置を必要していると言ってよい。そのジレンマを解決するための装置が次の二つの装置である。

(1) 野生生物の異者化（肉化、「他なるもの」化）：集団外部との関係の制御による拡大家族集団の生成と維持

拡大家族集団の外部における狩猟の場で「主体／他者」関係に基づいて「主体」としてのイヌイト個人（ハンター）が相互行為を交わす「他者」（「顔」をもって眼差すもの）としての野生生物個体が、屠殺を通して「異者」（「糧」としての「他なるもの」）としての「肉（食べもの）」に変換され、その「異者」（「糧」としての「他なるもの」）としての肉が拡大家族集団の内部に持ち込まれて分かち合われることで、「われわれ」としての拡大家族集団が生成され

て維持されると同時に、その「われわれ」（自集団）と互恵的な関係にある野生生物種が他集団として生成されて維持される。

ここでは、イヌイト個人（ハンター）との「主体／他者」関係にある野生生物個体（「他者」）が、屠殺と拡大家族集団内部への取り込みによって、イヌイト個人（ハンター）という「主体」と対等で互換的な関係にある「他者」（「顔」をもって眼差すもの）としての地位を奪われると同時に、拡大家族集団の内部でその成員から一方的に共有される（食べられる）「肉（食べもの）」という「異者」（「糧」としての「他なるもの」）に変換される。そのうえで、その「異者」（「糧」としての「他なるもの」）という「肉（食べもの）」に対して拡大家族集団の成員が「開いた自異関係」（「正義の秩序」によって「政治的境位」に生じる「社会関係」）に基づく「分かち合い」という非対称で一方的な相互行為を行うことで、それ以前からあるイヌイト同士の「主体／他者」関係のネットワークを維持したまま、拡大家族集団というまとまりが切り出される。また、この「他者」から「異者」（「糧」としての「他なるもの」）への変換（「糧＝肉」化）によって生成された拡大家族集団というまとまりに基づいて、そのまとまりという個体間関係よりも一つ上の次元にある集団のレベルが想像されるようになり、「異者」（「糧」としての「他なるもの」）としての「肉（食べもの）」に変換された野生生物個体が属するはずの野生生物種が、「自集団」と互恵的な関係を結ぶ「他なる集団」として想像されるようになる。こうして、「拡大家族集団というイヌイトの社会集団」と「拡大家族集団と互恵的な関係を結ぶ野生生物種」という二つの集団が生成されて維持される。

（2）子どもの他者化：集団内部の関係の制御による拡大家族集団の生成と維持（リクルートの過程）

拡大家族集団に一つの「システム」（個体：「非人称的な存在という現象」）として生まれ、拡大家族集団の大人たちと「システム／環境」関係（「存在することそのもの」たちの関係）を交わすことから始める「幼児」に対して、大人たちが「開かれた自異関係」（「正義の秩序」によって「政治的境位」に生じる「社会関係」）に基づく非対称で一方的な行為（一方的に愛情を注ぐ）で働きかけることで、「システム／環境」関係の「システム」として自己意識をもたない「幼児」（「非人称的な存在という現象」）は、①「閉じた自異関係」（「自己／他なるもの」関係）での自己中心的な「自己」としての「子ども」を経て、②対等な「主体／他者」関係での「他者」としての「大人」に変換されてゆく。

この変換の第一段階では、「幼児」を「一方的に甘やかす」という方法、第二段階では、「子ども」を「一方的にからかう」（イヌイト社会においては、「甘やかす」と並ぶもう一つの愛情の注ぎ方）という方法が採られる。このとき、「大人」たちの視点からは「幼児」も「子ども」も「開いた自異関係」（「正義の秩序」によって「政治的境位」に生じる「社会関係」）における「異者」（愛を一方的に注ぐことで自らの倫理的優越性が「享受」される「他なるもの」）だが、「大人」たちは「幼児」にとって「環境」（「非人称的な存在という現

象」）、「子ども」にとっては「閉じた自異関係」（「自己／他なるもの」関係）における「異者たち」（「糧」としての「他なるもの」）となる。

この過程では、（１）生物個体という「システム」としての幼児（「非人称的な存在という現象」）から、大人たちと対等で双方向的な「主体／他者」関係を交わし合う「他者」としての自律した「大人」が生産され、拡大家族集団の成員が補充されリクルートされるだけでなく、（２）対等に双方向的な「主体／他者」関係を交わす自律した「大人たち」が、「開かれた自異関係」（「正義の秩序」によって「政治的境位」に生じる「社会関係」）に基づく一方的で非対称な行為（一方的に愛情を注ぐ）で「幼児」と「子ども」（愛を一方的に注ぐことで自らの倫理的優越性が「享受」される「他なるもの」）に働きかけることで、対等で自律した「大人」たちの集団である拡大家族集団が生成される（「他なるもの」を媒介した社会性）。つまり、拡大家族集団の生成と維持がその成員のリクルートと同時に行われる。

Ⅲ 集団を生成して維持する能力：想像力による関係の変換と組織化

こうした集団の外部と内部の関係の操作と制御によるイヌイトの拡大家族集団の生成と維持のメカニズムから次の二つのことがわかる。

（１）想像力による関係の変換を通じた個体の変換（「システムとしての幼児」：「非人称的な存在という現象」）から「異者としての子ども」（大人から愛が一方的に注ぐことで大人の倫理的優越性が「享受」される「他なるもの」）を経て「他者としての大人」（「主体」）へ／「他者としての動物個体」（「顔」をもって眼差す「他者」）から「異者としての肉」（「糧」としての「他なるもの」）へ）を媒介に、①自律したイヌイトの「大人」（「主体」）同士の対等な「主体／他者」関係の拡張、②自集団（イヌイトの拡大家族集団）と他集団（野生生物種）という集団レベルの自他関係、という二つのレベルの「主体／他者」関係が生成される（「他なるもの」を媒介した社会性）。

（２）想像力による関係の変換によって、対等な「主体／他者」関係にある自律した他者たちを一方的かつ非対称にひきつけるブラックホールとしての「異者」（「異者としての肉」と「異者としての子ども」：「糧」としての「他なるもの」）を生成し、そのブラックホールに対して一方的で非対称な行為で共通に働きかけることで、自律した「他者」たちの対等な「主体／他者」関係を温存しつつ、一つの社会集団にまとめ上げることができる（「他なるもの」を媒介した社会性）。

このことから人類の社会集団の生成と維持に関して次の仮説を導き出すことができる。

（１）人類の社会集団が生成されて維持される際には、社会集団の再生産に必要な資源を①外部から取り込む過程と②内部から生み出す過程を想像力によって制御すること（変換と組織化）が要になっている。

①外部から取り込む過程：集団内の個体の生存に必要な資源を外部から取り込む生業システム（「他者」としての野生生物個体を「肉」という「食べもの」という「異者」（「他なるもの」）に変換して取り込む）。

②内部から生み出す過程：集団の再生産に必要な自律した他者の集団内で生成する生殖と養育のシステム（「システム」（「非人称的な存在という現象」）としての「幼児」を「異者」（「他なるもの」）としての「子ども」を経て「他者」としての「大人」に変換してリクルート）

（2）人類の社会集団の生成と維持にあつては、自律した「他者」同士の対等な「主体／他者」関係を基礎に、それぞれの他者の自律性と対等な「主体／他者」関係を維持したまま、社会集団というまとまりを生成して維持するための方法、つまり「自律」と「連帯」を両立させるための方法が解決されるべきもっとも重要な問題となる、つまり、レヴィナスのことばで言えば、倫理的な「主体／他者」関係の「愛」を維持しつつ「社会」を生み出すことが重要な問題となる。

IV 暫定的な結論

以上のようにイヌイトの社会生成の装置とレヴィナスの「他者」論のパラフレーズすることを通して、人類の社会性と倫理の進化史的基盤について、さらにはレヴィナスの「他者」論を人類学が継承する可能性について、次のことが明らかになった。

（1）「真なるイヌイト」とは「主体／他者」の愛の関係を双方向的に実現する「大人」のことであり、イヌイト社会の倫理の基盤は「主体／他者」の愛の関係を損なうことなく、二者間関係に閉じてしまう「主体／他者」関係を多者間関係へと拡張して「社会」を生成することにあるが、こうした「主体／他者」の愛の倫理的な関係は人類に普遍的な倫理の基盤でありうる。

（2）イヌイト社会における二つの装置にあるように、人類社会においては、「主体／他者」の愛の倫理的関係を損なうことなく、二者間の愛の関係を多者間関係の「社会」に拡張する方法には、レヴィナスがあげる「裁き」だけではなく、他にもさまざまな方法があり、その方法は「主体／他者」関係と「自己／他なるもの」関係のさまざまな変換操作によって実現されている可能性がある。その多様な方法をさまざまな人類社会ごとに民族誌的な細部に注目して明らかにすることで、レヴィナスの「他者」論に基づいて人類の社会性と倫理の進化史的基盤に迫ることにこそ、人類学の任務であると考えられることができる。